

自主経営と ワーカーズコープ

日本労協新聞編集部

倒産企業の再建、労働組合による「自主経営」の実践を5人が報告。仕事をどう生みだし、その質をどう高めていくか、みんなが経営責任をもちながら事業を継続させていくにはどうするか、など共通の問題が出されました。

●何でもできる便利屋に、住宅改修にも挑戦したい 甲斐田賢次さん(エヌ・アール・ユー)

16年前から国鉄解雇撤回闘争を行ってきたが、闘争が長期化するなかで、生活の維持や運動資金の確保から、やはり自分たちで仕事をつくろうとなり、草刈り、掃除、引越し、粗大ゴミの処分などの便利屋をはじめ、6年前に有限会社にした。清掃、リフォーム関係を中心に仕事を広げている。

不況ということもあり、毎月一定の仕事を確認することが困難。どう発展させていくか日々悩んでいる。同業者は年々増えていくこともあり、他との差別化をはかるためにも何でもできる便利屋になろうと、軽運送業や粗大ゴミの処分業者の資格をとっ



た。今後はマンション管理業務や介護保険での住宅改修事業に挑戦していきたい。

●タクシー労働者が誇りの持てる未来を 広瀬早美さん(ワーカーズコープ タクシー福岡)

自交総連福岡地連の組合員52人が1人100万円ずつ出資し、新しいタクシー会社を設立。12月開業の予定。

自交総連では「人並みな労働条件を」と年収500万円をめざして運動してきたが、現実には300万円程度。北九州では1日の運収が1万2千円程度、毎日働いても生活が成り立たない状況。

違法行為など悪いことをする会社、運転手だけが生き残っていく状況で、「まじめに働いている労働者が評価されない仕組みはおかしい」と運動をしてきたが、タクシー労働者の不満ぐらいにしか受け止めてもらえない。

本当に地域の人たちに信頼されなければ、運動は前進しない。「自交総連の組合員はやっぱり違う」といわれるような働き方、職

コーディネータ

奥 治 (労協センター事業団)

緒方 満 (自交総連福岡地連)

報告者

広瀬早美 (ワーカーズコープタクシー福岡)

高野 修 (大分自交労協)

北島大蔵 (つばさ流通)

小林千里 (新潮印刷)

甲斐田賢次 (エヌ・アール・ユー)

コメンテーター

内山哲朗 (専修大学)

場をつくろうと、2年間、議論を続けてきた。そのなかで自主経営だとどうしても雇う、雇われる関係が生まれ、経営責任が一部の人のみに押しつけられることもあって、ワーカーズコープという働き方を選択した。

タクシー労働者であるといいながら、仕事に誇りがもてない。そういう産業のままでもいいのか、という思いがある。労働者が立ち上げたワーカーズコープタクシーを何としても成功させたい。

●単なる価格競争ではない安心感のある印刷所に 小林千里さん(新潮印刷)

印刷産業も年々、ダンピング競争が激しく、平成8年に、隆文堂印刷が倒産。労働債権の確保と経営再建を求めて闘っていたが、厳しい交渉が続き、再就職の道を選ぶ人もでてきて、最終的には10人で再建を追求することになった。

会社が破産を選んだため、破産管財人や機械の購入業者と交渉し、200万円を準備し、機械を買い入れ、「有限会社新潮印刷」として再出発した。

本社ビルで仕事を続けていたが、1年後、そこが売れたからと移転を迫られた。場所を探すと、運良く製本業をやめたところが見つかったが、新たに3千万円の資金が必要となり、借り入れを行った。しばらくは資金繰りが厳しい状態が続いたが、去年は売り上げも伸び、何とか黒字に転換した。

お客様の立場にたったいい仕事、単なる価格競争ではない、安心してまかされる印刷所を確立し、販路を広めたい。

●自分たちで仕事を見つけ質を上げる努力も 北島大蔵さん(つばさ流通)

25年前に労働組合を結成。社長の放漫経営で会社は傾き、再建案を提案したが聞き入れないため、自分たちで会社をつくろうと18年前に設立した。

社員10人、中古トラック10台でスタートしたが、仕事はまったくこなかった。牛乳配達などアルバイトをしたり、駅前の自転車撤去や公園のゴミの回収などありとあらゆる仕事を行った。運送の仕事もポツポツ入るようになり、一生懸命いい仕事をやった

結果、だんだんと評価につながり、仕事が増えていった。

バブルが崩壊し、仕事はあるが1台あたりの売り上げは減ってきている。そこで新たに引越し業を開始した。現在、収入の3割以上を占めている。丁寧な仕事、いい仕事すれば、リピーター、紹介でどんどん増える。

自主経営の企業は10年もすると、潰れるか、普通の会社になり、ほとんど成功していない。一つの業種だけでなく、付加価値の仕事を自分たちでどれだけ見付けられるか、みんなが仕事の質を向上させる努力をすることが重要ではないか。

●一人ひとりが自立し協同した働き方が必要 高野修さん（大分自交労協）

自交総連大分地連の自主経営会社3社で「大分自交労協」をつくっている。

97年に「ケアワークドライバー」運動として、お客さんを目的地に安全に輸送するだけでなく、介護の心と専門的な知識、技術、能力を備え、高齢者や障害者をはじめと

するすべての利用者に接するドライバーになろうと提起した。翌年、「全組合員がケアワークドライバーになる」ことを方針として確認し、自分たちで2級のヘルパー講座も開催した。

これまでいくつかの問題にぶつかるなかで、労働組合的な経営ではうまくいかない、一人ひとりが自立して協同した働き方しか、今後を切り開いていく道はないのではないかと考えている。

自主経営を、誰のために、何のためにやるのか、見直す時期にきている。雇われている意識の人が増えているが、どう乗りこえるかが課題。「協同労働の協同組合法」の制定にも力を注ぎたい。

●コメンテーターの内山哲朗専修大教授

「労働者が闘う」というと、経営者と闘うということしかなかったが、本当に働く人が自分たちの仕事の場をつくるとなれば、自分自身との闘いになる。雇われていて、人に要求するありかたをどう乗り越えるかが問われるのではないかと、次の4点を提起。

事業を定着させ、安定させるためには、地域のなかに日常的な人とのつながりをつくることができるかどうか。また産業を産業のなかだけで考えていた



ら、発展はない。本当に年をとっても安心して暮らせる地域をつくるために、この仕事を地域のなかに位置づけようという議論をもっとしなければいけない。

事業にみんなで責任をもつために決定的に重要なのが予算。収入をどういう風にするかで自分たちの事業・運動の思想があらわれる。本当の組織をつくらうとすれば、みんなで考え、学習しあうことが大事。

よい仕事とは、本当に社会に必要とされ、社会と自分との交流のなかで、自分も高めていけるような仕事の中身があるものだろう。よい仕事にどうたずさわっていくか、考えて議論していくとおもしろいのではないか。

働く人が本当に能力や力を発揮できる仕組みとして、「協同労働の協同組合法」制定の運動を一層強めよう。